田畑の草種（くさぐさ）　野茨菰・沢瀉・面高（オモダカ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

オモダカ科オモダカ属で，全国のため池，水路，水田，湿地などに生育する抽水～湿生の多年生草本。種子と塊茎から発芽し，生育の初期は線形の葉であるが生育が進むと矢尻形をした葉をつける。葉柄は 15～60cm くらい，花柄は大きいものだと 1m くらいになる。花は単性花で雌雄同株。秋に種子と，地中に塊茎を作り越冬する。日本全国に分布する。

山際の中生種を栽培する田んぼで，8 月のお盆も過ぎ，残暑もここらでちょっと一息つこうかという頃，稲株の葉陰に白い清楚な花が見え隠れする。また，早稲種の稲田では傾いた穂の間に，また，時には穂の上にまで顔を覗かせる。その白い花の周りには，稲の葉より幅広で，矢尻の先のような葉が重なる。この矢尻のような葉は稲葉とほぼ同色。青田風が渡る稲田のそこかしこに見える白い花は，冷やした抹茶に浮かぶ白玉団子。稲田の持ち主には「雑草」として嫌われるのだろうが，筆者には正に一服の清涼剤。

田に生える「雑草」の中で，これほど人に愛された草も珍しい。その葉が矢尻様をしていることから尚武的意味合いから武人に好まれた。平家物語では，「小次郎は沢瀉を一入摺つたる直垂に，筋縄目の鎧着て西楼という白月毛なる馬に乗ったりけり（巻第九，一二之懸）」と，鎧縅の文様とともに熊谷小次郎直実を活写する。

オモダカをあしらった文様は奈良時代から使われていたという記録もあるが，武家の時代になって，その勝戦草（かちいくさぐさ）ゆえに多くの武家の家紋として使われ，江戸時代には 100 を超えたという。因みに，沢瀉紋を使い始めたとされる毛利元就の地元では，近年，毛利家の家紋にあやかって，「おもだか」という餡と栗を外郎で包んだ菓子も作られた。

面高は万葉集にも歌われている。多紀皇女（たきのひめみこ）の歌とされる巻の 12，その中の 3098 番。

おのれゆゑ罵（の）らえて居れば青馬の面高夫駄（おもだかぶだ）に乗りて来べしや

歌意は，あなたのために叱られているというのに，あなたはそんなそっくり返ったような顔をした駄馬（このあたりの解釈は相当に恣意的ではありますが）でやってくるのですか，というほどの意味だろうか。

近年になると，与謝野晶子や長塚節など，おもだかを詠った歌は多く，夏目漱石が虞美人草の中で甲野さんの顔をおもだかに見立てるなど，小説でも取り上げられている。しかし何といってもおもだかについては枕草子に一日の長を見る。その第 66 段。野の草について。

「草は菖蒲。菰。葵，いとをかし。神代よりして，さるかざしとなりけん，いみじうめでたし。もののさまもいとをかし。おもだかは，名のをかしきなり。心あがりしたらんと思うに。」

おもだかは高慢で思い上がっている，と手厳しい。筆者は，長い間，人の面（おもて）のような葉が稲の穂より高く出てくるから「面」が「高」く「面高」だと思っていた。ずいぶん違うようだ。「面高」の葉を顔に見立てるのは同じだが，昂然と「面」を「高」く上げ，斜めに反っくり返る。その威張り散らしたような姿を「面高」と呼んだようだ。

清少納言は「おもだか」に「心あがりしたらん」と思っていたようだが，筆者のように清涼の一服は思っていなかったのだろうか。そうそう，お茶の中の「抹茶」文化が一般化するのはもう少し先になってからだった。

統計データから　米の生産費　②（作物規模別の 10a 当たり労働時間）

平成 28 年産米の 10 a 当たり生産費のうち，労働費が 30.9％を占める。ここでは，主な作業別の労働時間（10a 当たり）を，作付規模 0.5 ～ 1 ha を基準（100）として規模別に比較する。

まず収量は， 1 ha 規模以上では 0.5 ～ 1 ha 規模を下回ることはないが，規模拡大に従って減収していく傾向にはない。これはこれまで培われてきた集約的な栽培管理作業が，大規模化されても粗放化されることなく，継承されていると思われる。

一方，労働時間は，0.5 ～ 1 ha 規模での 34.48 時間に比べ，1 ～ 2ha では約 8 割に，2 ～ 5ha では約 6 割，5 ～ 10ha では約 5 割，15ha 以上ではその 40％の 13.86 時間へと短縮化されており，大規模化に従っての省力効果が顕著である。

作業別にみると，「本田の耕起及び本田整地」で 0.5 ～ 1 ha 規模に比べ 15ha 以上では 34％に，「刈取脱穀」では 36％へと，規模拡大に応じて労働時間は短縮化される傾向にある。

「除草」は，15ha 規模以上では 0.5 ～ 1ha 規模の 39％へとかなり短縮化されているものの，5 ～ 10ha の 38％，10 ～ 15ha の 31％とほぼ同程度で，5ha 規模以上での除草作業の省力化の進みは，頭打ちになっている。このため，大規模化の進展に合わせた効率的な除草剤散布方法などの工夫や開発を一層進める必要がある。

規模拡大に伴う労働時間の短縮化がやや鈍い傾向にあるのが，「田植え」で 15ha 規模以上でも 0.5 ～ 1ha 規模の約 5 割，「育苗」は約 8 割程度に止まっている。従って，5ha 規模以上になると，作業別に占める「田植え」の労働時間の比重が高くなる。0.5 ～ 1ha 規模の 12％から 30％に，また，「育苗」では 9％から 18％へと，その割合が高まり，育苗・田植え作業の省力化の重要性も浮き彫りになっている。　（K.O）

作付規模別	10a当たり収量		10a当たり労働時間		主な作業別直接労働時間													
					育苗		本田耕起・本田整地		田植え		除草		管理		刈取脱穀		その他の直接労働	
	kg	比	時間	比	時間	比	時間	比	時間	比	時間	比	時間	比	時間	比	時間	比
0.5ha未満	485	96	42.69	124	3.01	93	6.48	131	4.35	107	2.46	124	12.88	131	5.76	126	5.92	135
0.5～1ha	504	100	34.48	100	3.23	100	4.96	100	4.06	100	1.99	100	9.82	100	4.58	100	4.40	100
1～2ha	525	104	27.82	81	2.96	92	3.73	75	3.30	81	1.48	74	7.86	80	3.24	71	4.02	91
2～3ha	536	106	22.26	65	2.81	87	3.24	65	3.09	76	1.15	58	5.17	53	2.72	59	3.03	69
3～5ha	538	107	20.85	60	2.46	76	2.79	56	2.77	68	1.13	57	5.06	52	2.33	51	2.90	66
5～10ha	563	112	17.64	51	2.64	82	2.25	45	2.41	59	0.75	38	3.68	37	2.21	48	2.85	65
10～15ha	537	107	16.38	48	3.10	96	2.08	42	2.33	57	0.61	31	2.97	30	2.14	47	2.37	54
15ha以上	544	108	13.86	40	2.44	76	1.70	34	1.87	46	0.78	39	2.52	26	1.65	36	2.11	48

農業経営統計調査（平成 29 年 10 月）より